

『毘尼母經』にあらわれる浄法

山 極 伸 之

1. はじめに

現存する律蔵には、伝統的に浄法と呼ばれてきた特殊な概念が見いだされる。これは、学処（*sikkhāpada/sikṣāpada*）等によって制限されている比丘や比丘尼にとっての諸規程を、特定の条件のもとで適法化する手段であり、律蔵中に様々な形で存在している。

浄法は、仏教教団がいかなる形態で存続し、また現実社会との関係の中で、どのように変化していったかを知る上で重要な視点である。あわせて、律蔵そのものの成立史や変遷史を考える上でも、浄法の検討は不可欠な要素であると考えられる。しかし、これまでのところ、現存する各種の律文献に示されるすべての浄法の用例を詳細に検討し、律を伝持した部派ごとの特殊性を踏まえた上で、総合的に浄法の内容に考察を加えた研究は行われてこなかった。

このような問題意識に立って、筆者は律文献中にみられる浄法を総合的に捉える研究を進め、その成果の一端を既に発表しているが¹⁾、本小論では、律文献中の『毘尼母經』に焦点を当て、この文献に説かれる浄法の内容を明らかにすると共に、その特徴等について若干の考察を加えることとする。

1) 山極 [2001b]、山極 [2003]、山極 [2009] 参照。尚、これら浄法に関わる諸研究を集約し、筆者は2009年に博士学位請求論文として「インド部派仏教教団論と律蔵の歴史」を佛教大学に提出し、2010年に学位の授与を受けた。さらに、そこでの検討内容の一部については、次に掲げる論文としても公表しているので参照されたい。山極 [2013]、山極 [2014]。また、特殊な律文献の一つである『鼻奈耶』についても検討を行った。山極 [2019] 参照。

律文献としての『毘尼母經』の特徴や位置づけについては、既に平川彰がその概要をまとめているが²⁾、『毘尼母經』の内容そのものを具体的に取り上げた研究はこれまで殆ど行われてこなかった。その理由は、〈パーリ律〉『四分律』『五分律』等のいわゆる広律のように三蔵の一角を形成する律蔵とは異なり、律文献というカテゴリーの中で、この文献をどのように位置づけるべきか、またこの文献がいかなる部派に帰属するのかが不明であったことなどによる。

『毘尼母經』自体の律文献としての位置を明確化するためにも、様々な観点からこの文献を分析することが必要であり、そのための試みの一つとして、浄法という視点から『毘尼母經』について検討を行うものである。

2. 『毘尼母經』に見られる浄法の事例

①羯磨の一つとしての浄地羯磨

『毘尼母經』は、註釈の最初の事項（＝論母）として「受具（受具足）」を取り上げ、これに関連する種々の解説を巻一から巻二にかけて行っているが、そ

2) 平川 [1960/1999, 270-272; 279]、平川 [1960/2000, 134; 166; 168, 219; 225; 262; 295] 参照。上記において平川は、『毘尼母經』を基本的に律の註釈文献と位置づけている。確かに、『毘尼母經』の内容は、律蔵中に使用されている用語や概念についての解説であり、その意味では註釈の形式を備えているが、一方でこの文献が「經」と称されている点も含めて、律文献の中でどのように位置づけるべきかについては慎重に判断する必要がある。例えば、『毘尼母經』中には、「諸經中有說比丘戒律處。集爲比丘經。諸經中有說戒律與尼戒相應者。集爲尼經。諸經中乃至與迦稀那相應者。集爲迦稀那犍度。諸犍度母經。增一比丘經。比丘尼經。總爲毘尼藏。」(T24, 818a16-20)、あるいは「所以言毘尼經者。諸經中與毘尼相應者。總爲比丘比丘尼經。諸經中與迦稀那衣相應者。總爲迦稀那犍度。比丘經。比丘尼經。一切犍度。摩得勒伽。毘尼增一。此五種總爲毘尼藏。是故名毘尼經。」(819c18-22) という記述が存在する。ここでの「母經」や「摩得勒伽」がいかなる文献を指しているのかは確定できていないが、もしもこれらが『毘尼母經』中の「論母」、あるいは『毘尼母經』それ自体を意味しているとするならば、「比丘經（＝波羅提木叉經）」や「犍度」と並んで、『毘尼母經』も註釈ではなく、律そのものを意味することとなる。ここで直ちに結論を出すことはできないが、本小論での検討を含め、『毘尼母經』の内容に関する詳細な検討なしに、この文献の正確な位置づけは困難である。この点については、すでに Shayne Clarke が着目し、『毘尼母經』の原タイトルの問題ともあわせた考察を行っている。Shayne [2004, 87] 参照。なお、『毘尼母經』の特徴等を概説したものとしては、境野 [1932]、三友 [2005] 参照。

の中に「業（＝羯磨）」の分類を示す箇所がある。そこでは種々の羯磨が提示されるが、その中に「不白不擯罰」なる羯磨という分類があり、そこで以下のような解説がなされている。

云何名爲不白不擯罰。若有比丘。僧差營房舍。此業非白亦非擯罰。又復此人。僧初與羯磨立作營房人。是亦非白非擯罰。是業名爲非白非擯罰。又復解羯磨非一。如羯磨亡比丘物。此羯磨非白非擯罰。是故有異。受功德衣羯磨亦如是。如結大界羯磨淨地羯磨。如此等不在白擯罰羯磨也。(T24, 807b25-29)

何を不白不擯罰を行うと名づけるのか。もし比丘がいて、サンガが派遣して房舎を管理するならば、この羯磨（＝業）は白ではなく、また擯罰の羯磨でもない。またこの人に、サンガが初羯磨を与えて、推薦して営房人とするならば、これもまた白でなく擯罰でもない。このような羯磨を非白非擯罰と名づけるのである。また、羯磨を解くことも一つだけではなく、亡比丘物に対する羯磨のようなもの、これもまた非白非擯罰の羯磨である。したがって異なる場合もあるのであって、受功德衣の羯磨もまた同様であり、結大界の羯磨、淨地の羯磨のごときも〔同じ〕である。以上のようなものが、白擯罰羯磨ではないものである。

ここでは、「不白不擯罰」がいかなるものであるのかについて説明が行われ、房舎の管理等のために派遣する比丘を選ぶ羯磨は白ではなく、また擯罰の羯磨でもないということで「不白不擯罰」に当たるとする。これと同類のものとして、亡比丘物に対する羯磨、受功德衣の羯磨、結大界の羯磨と並んで淨地羯磨が示されている³⁾。但し、その内容についての言及はない。

②淨厨・淨厨處羯磨・淨施主・飢饉の事例(1)

次に、比丘の食に関する解説を行う部分に、淨厨の設置に関する因縁譚等が示される⁴⁾。そこでは、前日に残った食を巡って比丘が争っていたことを原因

3) 淨地については、山極 [2001a] 参照。

4) 淨厨については、山極 [2001a] および山極 [1999] 参照。

として、佛が以下のように淨厨を設けるよう定めたことが記されている。

佛言。從今已去。宿食及在大界内食。無淨厨者一切不得食。衆僧住處初立寺時。衆僧齊集。應先羯磨作淨厨處。後羯磨衆僧房舍處。若當時忘誤不羯磨作淨厨處者。應若憶還解大界後解小界。先羯磨淨厨處。(809c11-16)

佛は言った。「いまより以後、宿食および大界の内食について、淨厨がない場合は、すべて食べてはならない。衆僧の住處に初めて寺を立てる時は、衆僧がみな集まって、まず羯磨で淨厨處を作るべきであり、後から羯磨で衆僧の房舍處を〔作るべき〕である。もし順序を忘れ誤って、羯磨を行わずに淨厨處を作った場合、もし後から思い出したならば、また大界を解き、その後で小界を解いてから、先に淨厨處を羯磨しなさい」と。

ここでは、淨厨がなければ、宿食および大界の内食はすべて食べることが許されないとされている。さらに、僧院を建てる際に淨厨處を定めるための羯磨の方法が具体的に提示されている。一方、この解説部分の末尾には、以下のような記述がある。

有比丘外得果来即與淨施主。施主値世飢饉不還本主。佛因而制戒。從今已去。若飢饉世得自畜而食。池中果一切果亦如是。(809c23-26)

比丘がいて、外で果を得てやって来て、〔その果を〕淨施主に与えた。施主は世の中が飢饉であったので、〔その果を〕元の主〔である比丘〕に還さなかった。佛はこれによって戒を制定された。「いまより以後、もし世の中が飢饉であれば、自ら蓄えて食べることができる。池の中の果も一切の果もまた同じである」と。

この部分は、飢饉が発生し、食を得ることが困難な状況において食をどのように扱うかについて解説している箇所であり、その中で、果を得た比丘が淨施主にそれを与えたが、飢饉であったため淨施主が本来の持ち主にそれを還さなかったとされている⁵⁾。これを受けて、佛は、もし世が飢饉である場合、自ら蓄

5) この事例は、比丘が自身の所有物の所有権を他の比丘に与え、他者の所有物とした上で、その者から使用の許可を得て使用することで、捨墮などの罪に抵触しない形をとる、いわゆる淨施に該当する。従って、ここでの「淨施主」は、淨施を行う相手を指すこととなる。山極〔2009〕参照。

えて食することが、池中果も一切果についても許可したことが説かれている。飢饉における食への対応方法については、諸律において「儉開八事（七事）」と称される箇所があり、そこでは食の貯蔵等に関する規定が飢饉時に緩和される事例が示されている⁶⁾。『毘尼母經』のこの箇所も、それを踏まえての内容であり、律の記述内容との対応を検討する必要がある箇所と言える。

③淨厨處・淨人・飢饉の事例(2)

次の事例は、前述の②と共通する内容を示すものである。但し、②からは少し離れた箇所であり、波羅提木叉や布薩に関する解説を行っていく部分に、唐突に食の貯蔵（宿食）に関する内容が示されている。

若界裏不羯磨淨厨處宿食沙門皆不得食。當於爾時。佛遊於跋利耆國。展轉遊行到毘離國。聞諸比丘聲高。佛問阿難。此衆僧諍何等事。阿難即往看。見比丘積聚食甚多。來白佛言。世尊。舊住比丘沙彌及淨人。欲辦食與客比丘。是以聲高。佛即告阿難言。汝往語諸比丘。從今以往。非僧集羯磨淨厨界内宿食皆不得食。(814b28-c6)

もしも界の内側で羯磨を行っていない淨厨處であるならば、そこでの宿食については、沙門はすべて食べることはできない。またその時、佛は跋利耆國に赴かれ、あちこちを遊行して毘離國に至った。そこで比丘たちが大声を出しているのを聞き、佛は阿難に尋ねた。「この衆僧は何を争っているのか」と。阿難が行って様子を見ると、食を積み重ねている比丘たちが極めて多い様子を見た。戻ってきて佛に言った。「世尊、旧住の比丘・沙彌・淨人が客比丘に食を与えようとして大声になっているのです」と。佛は阿難に告げて言った。「お前は比丘たちに言いなさい。いまより以後、僧が集まって淨厨の羯磨をなした界内の宿食以外のものは、すべて食べることはできない」と。

この部分では、まず羯磨で淨厨處の設置を行っていない場所では貯蔵した食を

6) 「儉開八事（七事）」については、山極 [1999] 参照。また、飢饉のような緊急事態への対応に関しては、Gregory Shopen による研究がある。Shopen [2018] 参照。

食べることができないとされ、その因縁譚が提示される。その内容は②に比べて詳細なものとなっており、最終的に淨厨の羯磨を行った界内の宿食以外は食べてはならないと定める。

次に場面が変わり、佛が波羅捺に居る時、飢饉が発生し、界の外に置いておいた食が盗まれる等の事件が起こった。そこで佛は、飢饉の際には界の中で食を調理し、界内で食することを許可する。さらに、沙弥や淨人を介すると、比丘のもとに食が届かない場合があるので、比丘が自分の手で調理することも許可する。また、病気の比丘の場合、遊行の旅の途上で食を見つけ、淨人が来るのを待つ際の留意点など、幾つかのケースを掲げ、飢饉の際には比丘が自ら調理し、食を保管し、食すことを許可することが説かれており、最終的に飢饉でなくなれば、それらを行うことを禁止するとされる⁷⁾。これらの事例も②に掲げた「儉開八事（七事）」との関連を示すものである。

④亡比丘物の分割と淨人

次に、亡くなった比丘の持ち物の分配に関する解説部分において、淨人の存在を示す箇所があるが、その中に以下のような記述が見られる。

分亡比丘物。衣鉢坐具針氈縵囊拘執衣毛深三指傘蓋剃刀。是名可分衆具。

7) 復於一時。世尊在波羅捺。時世飢饉。衆僧皆積聚穀米界外安止。人皆盜持去。諸比丘 * 展轉相語。往 1 白世尊。佛言。儉年聽穀米在界裏。乃至藥草亦如是復於一時。世儉穀貴人無禮義。諸比丘在界外熟食。有力者皆搏撮持去。諸比丘白佛。佛言。聽汝等界裏熟食界內食。復爲沙彌淨人分減持去。復白世尊。佛言。聽諸比丘手自熟食爾時世尊。在舍衛國。有一病比丘常食粥。檀越爲日日送。值一日中城門閉。不得來比丘失食。佛即爲此病比丘。界裏白二羯磨結淨厨處。聽此淨處煮粥食之。時諸比丘生疑。謂此比丘食共宿食界裏熟飯食手自作食。佛言。非宿食非界裏熟食非手自作。乃至藥草亦如是爾時世尊。在波羅捺國。時世飢荒。諸比丘隨路而行。見熟果皆落在地。不得自取待淨人頃。後有白衣來至即取持去。比丘白佛。佛言。聽汝草覆頭待淨人。草覆頭待淨人頃。復有白衣來披草見之即取持去。復白世尊。佛言。聽汝手自取之持去至淨人所著地還如法受食之。諸比丘白佛。齊穀貴已來。願世尊。聽諸比丘食殘宿食手自作食自得取果。佛言齊穀貴已來可爾若比丘中前得食。更至餘處得食已足。還來以此食施施主。時世飢儉施主即食。比丘往白佛。昨日有殘食。與施主望後日得食。施主即自食。佛言荒年聽無施主得自舉食。時有大德衆僧。爲國王大臣所重。諸檀越請入聚落食。食已餘殘持來到寺。與餘比丘欲食者。若世儉時不作殘食得食至豐時與施主作殘食法然後得食。若於後時穀貴人民飢饉。諸比丘食後得果欲食者不作殘食法亦得食。後豐已不得。儉時若比丘。得種種草根及藥根可食者。無施主得自舉食。後豐時不得。

(814c6-815a13)

尊者迦葉惟説曰。分亡比丘物法。先將亡者去藏已。衆僧還來到寺。現前僧應集。集已取亡比丘物著衆僧前。遣一人分處可分不可分物。各別著一處。三衣與看病者。餘物現前僧應分。若有奴婢應放令去。若不放應使作僧祇淨人。象駝馬牛驢與寺中常住僧運致。此亡比丘。若有生息物在外。應遣寺中僧祇淨人推覓取之。得已入此寺常住僧。(815b8-17)

亡比丘の物を分けるとは、衣・鉢・坐具・針・氈・縊・囊・拘執衣・毛深・三指傘蓋・剃刀、これらを分配可能な衆具と名づける。尊者迦葉惟は説く。「亡比丘物の分配法とは、まず亡者の遺体を運び、埋めおえて、衆僧がもどって来て寺に至ったならば、現前僧が集まるべきである。集まったら、亡比丘物を取り、衆僧の前に置き、一人を分處に派遣して、可分と不可分の物をそれぞれ別々に一處に置き、三衣は看病者に与え、残りの物は現前僧で分配すべきである。もし奴婢がいたら、自由にして去らせるべきである。もし自由にして去らせない場合は、サンガの淨人とすべきである。象・駝・馬・牛・驢は寺中の常住僧に与えて運ばせるべきである。この亡比丘に、もし生息物がいて外に在れば、寺中のサンガの淨人を派遣して、これを取らせるべきである。手に入れおわれば、この寺の常住僧に入れるべきである」と。

ここでは、尊者迦葉惟 (kāśyapīya) の説とされているが、亡くなった比丘の持ち物の分配方法が示されている。その中で、亡比丘に「奴婢」がいた場合は、かれらを放免して去らせるか、それが出来ない場合はサンガの淨人とすべきであるとしている。また、象などの動物については僧院の中の常住僧に与えとし、もし亡くなった比丘に、外に「生息物」があれば、サンガの淨人を派遣して、それを探し求めて手に入れ、これを僧院の中の常住僧に入れるべきとしている。ここでの「生息物」が具体的に何を指しているのか不明確であるが、奴婢の場合も、生息物の場合も、サンガの淨人によって対応すべきことを示している。

⑤重衣における二種の淨

④に引き続いて、重衣に関する解説部分があり、そこで以下のように二種の

浄に関する記述が見られる。

何故名重衣。重有二種。一者價重。二者能遮寒。故名爲重。衣者要浄受持。
不浄不得。浄有二種。一染已著色名爲浄。二者著色已安三點。亦名爲浄。
若衣作已浣染三點。諸檀越見知是沙門服非外道衣。是故名爲重衣。
(815b21-26)

いかなる理由で重衣と名づけるのか。重に二種ある。一つは價が重だからであり、二つはよく寒さを遮るからである。この理由で重と名づけるのである。衣は必ず浄なるものとして受持すべきであり、不浄を〔受持することは〕できない。浄には二種ある。一つは染めおわって色をつけるのを浄と名づけるのである。二つは色をつけおわってから、三點を施すものであり、また浄と名づけるのである。もし衣を作りおわって、浣染して三點すれば、諸檀越が見ても、これは沙門の服であって外道の衣ではないと知る。この理由で重衣と名づけるのである。

ここでは、重さと厚みの点から重衣であるとした上で、浄なるもののみ受持が可能とする。その場合の浄には二種あるとし、染めて着色することにより浄とするものと、着色してから三點をつけて浄とする、いわゆる点浄の内容が示されている。

⑥衣の浄施

⑤の直後には、畢陵伽婆蹉（Pilindavatsa）に対して、革履・動物の車・眼の病気の薬・種々の重物などの布施がなされ、それらを許可していく部分が説かれている。その中に、以下の記述がある。

若有人施柔軟極價好衣。聽作浄施畜之。(815c7-8)

もし人があって、柔軟で極めて価値の高い好い衣を施すならば、浄施してこれを蓄えるのを許可する。

これによると、柔軟極價の好衣が施された場合、浄施をなせばこれを蓄えることができるかとされている。但し、その具体的な内容については説かれていない。

⑦果に対する淨

次に、佛が刀子を用いることを許可する場合が次のように示されている。

佛聽畜刀子。一用割皮。二用剪甲。三用破瘡。四用截衣五用割衣上毛縷。
六用淨果。乃至食時種種須故。是以聽畜。(81622-24)

佛は刀子を蓄えることを許可した。一つには皮を割くのに用いる。二つには甲を剪るのに用いる。三つには瘡を破るのに用いる。四つには衣を裁断するのに用いる。五つには衣の上の毛縷を割くのに用いる。六つには果を淨とするのに用いる。乃至、食する時には種種に用いることがあるので、これをもって蓄えることを許可する。

刀子を許可する理由の第六として「果を淨とする場合」が示されているが、具体的な方法等についての言及はない。

⑧人養生具と淨人

次に、「人養生具」と「非人養生具」に関する説明として、以下のような記述がある。

云何名爲人養生具。衆僧淨人是。非人養生具。象駝馬驢牛。能與僧遠致者。名爲非人養生具。(817a20-22)

何を人養生具と名づけるのか。衆僧の淨人がそれである。非人養生具とは象駝馬驢牛がそれであり、よく僧を遠くに到らせてくれるものであり、そのために非人養生具と名づけるのである。

二つの解説のうち特に後者で、非人の養生具が「象駝馬驢牛」など、僧のために遠くに運んでくれるものとされている。これに対して、人の養生具が前者になり、それが衆僧の淨人であるとされている。

⑨淨地とそこに生育した樹果

次に、サンガの淨地に果樹が生育した場合の対処方法について、以下のような記述がある。

僧淨地中忽生果樹。此樹長大。有枝曲向不淨地中。佛語諸比丘。遣淨人繩擊牽向淨地。後諸比丘心疑。此果本在不淨處。今牽在淨處。爲得食不。佛

言。若果落不淨地者不得食。不落者得食。復有果生不淨地中。但枝及蔓皆向淨地。若落淨地者得食。不落者不得食。(817b8-14)

サンガの淨地の中に忽ちに果樹が生じた。此の樹は長大であって、枝があったが曲がって不淨地の中に向かった。佛は諸比丘に語り、淨人を派遣して、繩をつけさせて引っ張って淨地に向かわせた。後に諸比丘に疑いの心が生じた。「この果はもとは不淨處にあったが、今は引っ張って淨處にある。食べることが出来るのだろうか、出来ないのだろうか」と。佛は言った。「もし果が不淨地に落ちれば食べることはできない。[不淨地に]落ちていないものは食べることができる。また果があつて不淨地の中に生じたが、枝と蔓はみな淨地に向かった場合、もし[果が]淨地に落ちれば食べることができる。もし[淨地に]落ちなければ食べることはできない」と。ここでは、淨地の中に果樹が生えていて、その枝が長く広がり不淨地にまで至っている場合、淨人に命じて枝に繩を結び、それを引っ張って淨地の方に向かわせることが記されている。さらに、もとは不淨地にあった果を淨地に導いた場合、その果実を食べてよいかという比丘の疑いに対して、佛は、果が不淨地に落ちれば食べてはならないとし、落ちていないものは食べてもよいとする。あわせて、もとは不淨地に生じた果樹の枝が淨地に至っている場合、果が淨地に落ちれば食べてもよいとし、落ちていないものは食べてはならないとしている⁸⁾。

⑩果に対する五種淨・七種淨

⑨に続いて、以下に示すように、外道が「比丘は無慈悲にして命のある果、生命のある食を食べている」と比丘を批判したため、佛が果に淨を行ったもの

8) 淨地や不淨地に生育した果樹や果実が、どのような状態である場合に淨あるいは不淨と判断されるのかについては、『四分律』(T22. 874c20-875a14) および『摩訶僧祇律』(T22. 477a22-c20) に詳細な解説がある。最終的に果実がどこに落ちるのかによって淨・不淨を判断するという点では、『毘尼母經』に説かれる内容と、『四分律』『摩訶僧祇律』の内容は共通すると見ることが出来るが、果樹の位置や、淨・不淨の判断を語る律の表現形式という観点からみると、同一とは言えないものの、『毘尼母經』と『四分律』が非常に近い関係にあると見ることが出来る。山極 [2001a] 参照。

のみ食することができる」と定め、その方法としての五種淨および七種淨が記されている。

有比丘不淨果而食。外道譏嫌言。諸比丘無慈心此果有命云何食生命也。爲世嫌故佛即制。諸比丘果要淨而食。不淨不得食。淨有五種。一火淨二刀淨三鳥淨四果上自有壞處淨五却子淨。復有七種淨。一却皮淨二破淨三爛淨四萎淨五剉刮淨六水所漂淨七塵土坌淨。此是淨法（817b18-25）

比丘がいて、不淨果を食べていた。外道がこれを嫌って言った。「諸比丘には慈心がない。この果には命があるのに、どうして生命を食べるのか」と。世の人々にも嫌われるため、佛は規則を制定した。「諸比丘は必ず果に淨を行ってから食べなさい。不淨なるものを食べることはできない。淨には五種ある。一つは火淨、二つは刀淨、三つは鳥淨、四つは果上自有壞處淨、五つは却子淨である。また七種淨がある。一つは却皮淨、二つは破淨、三つは爛淨、四つは萎淨、五つは剉刮淨、六つは水所漂淨、七つは塵土坌淨である。これらが淨法である。

これによると、五種淨とは、①火によって、②刀によって、③鳥によって傷がつけられたもの、④果の上に自然と壞處ができたもの、⑤種がなくなったものである⁹⁾。また、七種淨とは、①皮がなくなったもの、②破れたもの、③爛れたもの、④萎んだもの、⑤包みが破れたもの、⑥水所を漂ったもの、⑦塵土に埋もれたものであるとされている。

⑪和合の衣と淨衣

次に、比丘が布施として受ける衣に関して、二種の和合の事例が示され、和合している場合には蓄えることを許可、和合していない場合には不許可となる場合が示される。二種の和合とは、色の和合と衣の和合とであり、色の和合に

9) 五種淨に関しては、諸律にも類似の記述がみられる。〈パーリ律〉(VRI Cūlavagga Pāli, 266.23-26; PTS VP II, 109.25-29)、『五分律』(T22, 170c24-171a16)、『四分律』(T22, 875a14-27; 1006a3-12)、『十誦律』(T23, 95c18-24; 268b29-c5)。また、『摩訶僧祇律』には六種淨としての解説がある(T22, 339a21-c1; 478a20-b23)。但し、いずれの律にも七種淨についての記述は見られない。また五種淨に関しても、意味するところは概ね一致するが、いずれの場合も『毘尼母經』の表現と完全には一致しない。

については衣を染める際の染め方や色の付け方について和合となり蓄えることが許される場合が提示されるが、その後に、以下のように衣の和合が示される。

衣和合者。若衣作淨納未作淨。縫納著衣上。若衣未淨納已淨者。縫納著衣上。此二皆名淨衣。若衣未滿十日未作淨施。納已作淨施。縫納著衣上得畜。若納十日未滿未作淨施。縫納著衣上得畜。故名衣和合。淨施法。一日得一日作淨施。若過十日不作淨施。犯尼薩耆。若復放逸故不說淨者。以心惡故。不滿十日皆犯捨墮。(820b15-c6)

「衣和合」とは、もし衣は淨を行い、納はまだ淨を行っておらず、納を縫って衣の上に著けている場合、あるいは衣はまだ淨を行っておらず、納は既に淨を行い、納を縫って衣の上に著けている場合、この二つはみな淨衣と名付ける。もし衣がまだ十日を満たさず、まだ淨施を行っていないくとも、納は既に淨施をなし、納を縫って衣の上に著けている場合は蓄えることができる。もし納がまだ十日を満たさず、まだ淨施をなしていないくとも、納を縫って衣の上に著けている場合は蓄えることができる。したがって「衣和合」というのである。淨施の法は、[衣を] 第一日に得れば、第一日に淨施をなすのであり、もし十日を過ぎて淨施をなさなければ尼薩耆（＝捨墮罪）を犯すことになる。もしまた、放逸のゆえに説淨（淨施の言葉を説くこと）を行わない者は、心が悪であるから、十日に満たなくても、みな捨墮を犯すことになる。

ここで言及されている「衣和合」とは、通常の「衣」と、修繕補填などに用いる「納」とを縫い合わせた衣に関して蓄えることが想定されており、どちらかを作淨をしていれば、両者を和合させた衣は淨と位置づけられ、蓄えることが

10) 納と作淨とに関しては、『四分律』の迦稀那衣犍度に次のような記述がある。

「有如此五事因縁。受功德衣。受功德衣已。得五事。何等五。得畜長衣離衣宿別衆食展轉食前食後不囑比丘入聚落。受功德衣已。得作五事。衆僧應如是受功德衣。若得新衣。若檀越施衣。若糞掃衣。若是新衣。若是故衣。新物帖作淨。若已浣。浣已納作淨。不以邪命得。不以相得。不激發得。不經宿得。不捨墮作淨。即日来。應法。四周有縁。五條作十隔。如是衣僧應受作功德衣。」(T22, 878a2-11)

ここでの内容は、上記の『毘尼母經』の納に関する記述と直接対応するわけではないが、衣を調達する際に、納を行うことが作淨に該当することを示しており、両者の関係には注意が必要である。

可能となる場合が二種示されている¹⁰⁾。いずれの場合も作浄が前提となっており、作浄を行う時期についても捨墮法第一条をもとに解釈がなされている。

⑫浄厨處

次に、浄厨處に関して以下の記述が見られる。

若比丘行来到他寺上。應問此寺中一比丘結大界處。復問離衣宿處。兼問衆僧淨厨處。亦問布薩説戒處。如是等處皆問一人。故名略問。(821b23-26)

もし比丘が遊行を行って他の僧院に到着したら、まずこの僧院の中の一人の比丘に、大界を結んだ場所を尋ねるべきである。さらに離衣宿の場所について尋ね、かさねて衆僧の浄厨の場所について尋ね、また布薩説戒の場所について尋ねるべきである。これらのような場所については、みな一人に尋ねるものであるから、それゆえに略問と名づけるのである。

ここには、遊行などで移動した比丘が、他の僧院に至った際に確認すべき場所の一つとして、衆僧の浄厨處が挙げられている。

⑬應作處と浄地・浄處所

次に、「應作處」に関する解説部分に以下のような記述がある。

有應作處。何者是。尼師壇有破穿處。應用弊納補四邊蔭一寸。如是廣知。若有瘡處應治。若衆僧食處應掃。若和尚阿闍梨食處應掃。是名處所。若比丘病。佛聽煮粥食之。無浄地。衆僧當與作白二羯磨作浄處所。如是等皆名處所 (821c11-17)

應作處があるが、これはどのようなものか。尼師壇（坐具）に破れや穴ができた場合、まさに古くなった修繕用の布を用いて、四辺を補って一寸を隠すべきである。このように広く知るべきであり、もし瘡處があれば治すべきである。衆僧の食處はまさに掃くべきであり、和尚阿闍梨の食處もまさに掃くべきである。これを處所と名づける。もし比丘が病気であれば、佛は粥を煮てこれを食べることを許しているが、もし浄地がなければ、衆僧はまさに白二羯磨を行って浄處所をつくるべきである。これらのような場所を、すべて處所と名づける。

ここでは「應作處」の説明がなされており、その中に「處所」と名づけられる場所があることが解説されている。さらに病気の比丘に対しては、淨地があればそこで粥を煮て、なければ淨地を設けて対応すべきであり、それが「淨處所」と位置づけられることが示されている。

⑭迦絺那衣を受けることによる五種の利

次に、迦絺那衣を受けることによる五種の利について、以下のような記述がある。

毘舍離飢饉如上文説。佛聽畜迦絺那衣。有五種利。一得中前數數食。二得有檀越來請得別衆食。三得畜長財不説淨。四得離衣宿。五不白得出界。是名受迦絺那衣利。(822a23-27)

毘舍離の飢饉については、先に説いた通りであり、佛は迦絺那衣を蓄えることを許可されたが、それには五種の利（行うことのできる権利）がある。一つには正午前に數數食を得ること、二つには信者がやって来ることがあれば別衆食を得ること、三つには説淨を行わずに余分の財を蓄えることができること、四つには離衣宿を得ること、五つには白なしに界を出ることを得ること。これを迦絺那衣を受けることによる利と名づける。

ここでは、迦絺那衣を蓄えることが許可されることにより、比丘には五種の権利が生じることが示されているが、その三として、説淨すなわち淨施の手続きを行わなくても余分の財を蓄えることができることが説かれている。

⑮風病と淨人

次に、風病に対する対応を示す部分に、以下のような記述がある。

治風病法。當用蘇毘勒漿。此漿作法。先遣淨人搗大麥器中盛之。著水經二三日。小酢已淨濾飲之。若和尚病。弟子應作此漿養病。弟子若病。和尚亦應如此 (824c15-19)

風病を治す法とは、まさに蘇毘勒漿を用いるべきである。この漿の作法は、まず淨人を派遣して大麥を叩いて器の中にこれを盛り、水につけて二三日を経て、小さく搾って淨濾してこれを飲むべきである。もし和尚が病めば、

弟子がこの漿を作って病を養うべきであり、弟子がもし病めば、和尚がまたこのようになすべきである。

ここでの風病が具体的にどのような病であるかは不明であるが、薬として大麦から作る蘇毘勒漿なるものがあること、またそれを作るには淨人を要すること等が示されている¹¹⁾。

⑩絡囊の保持と淨人

次に、托鉢時に鉢で施食を受ける際に用いる絡囊（鉢入れ）を比丘が保持する由来を解説する場面に、以下のような記述がある。

所以令畜絡者。沙彌淨人共外行得果。好者自食惡者與師。佛聞此已。教諸比丘令得作絡囊。得果著中堅繫口自持之。至寺内洗手如法受食。尊者薩婆多説曰。有一比丘共淨人乞食。此淨人捉食不用心。外道著毒藥不覺。比丘到住處食即命終。佛因此勅諸比丘。從今已去。各各作絡囊盛鉢好自持之。以諸因縁聽畜絡也（826b29-c7）

絡を蓄えさせる所以とは、沙弥・淨人とともに外に出かけ果を得たが、好いものを自分で食べ、悪いものを〔沙弥・淨人は〕師に与えた。佛はこれを聞いて、諸比丘に絡囊を作らせることを許し、果を得た場合は〔絡囊の〕中において、堅く口をしぼり、自分でこれを持つようにさせた。尊者薩婆多（＝説一切有部）が説くには、一人の比丘が淨人とともに乞食を行ったが、この淨人は食を得ても用心をしなかったので、外道が毒薬を混ぜたのに気付かなかった。比丘は住處に至ってこれを食べ、死んでしまった。佛はこれによって諸比丘に「いまより以後、おのおのが絡囊を作り、鉢を盛り、よく自分でこれを持て」と命じ、諸々の因縁によって、絡囊を蓄えることを許可したのである。

ここには、鉢を入れて運ぶ際に用いる絡囊の保持を許可するに至った因縁が二

11) 淨の問題とは直接関わらないが、この部分の直後に、蘇毘勒漿を傷に塗ると死んでしまうので傷に塗ることを禁ずる事例と、屍体捨て場にいた病人に比丘が慈悲心によって蘇毘勒漿を施し病者が死んでしまったが、これを無犯とする事例が掲げられており（824c20-26）、「安楽死」に関わる事例として、注意が必要である。

種掲げられている。佛が許可した因縁の内容は上述の通りであるが、それぞれに淨人とともに乞食に行く様子が語られており、淨人の存在が前提となっている。

⑰比丘尼に対する蒜の禁止を語る因縁譚と淨人・守園人

次に、病人以外は蒜を食べてはならないことを解説する場面の最後に、比丘尼に関する蒜の禁止の因縁譚として、以下の記述がある。

爾時世尊在毘舍離。城外有一檀越大種蒜。偷羅難陀比丘尼數數過此蒜園邊行。檀越善心爲福德故。問言。尊者須蒜食不。尼答言。素自不能食。得蒜下食甚善。檀越即施之。日許與衆僧五顆蒜。偷羅難陀即白尼衆某檀越日許僧五顆蒜。僧若須者遣沙彌尼往取。有一尼須蒜。遣式叉摩尼沙彌尼往取。正值蒜主持蒜入城市易。有一淨人守蒜園。沙彌尼問。蒜主何處去。淨人答言。入城市易。沙彌尼從彼索蒜。淨人答言。我不知也。但知守蒜。沙彌尼怒曰大家見與。汝豈得護。手自掘之。此是和尚分。此是阿闍梨分。此是今日分。此是明日分。如是分處恣意持去。蒜主迴還見之。問守園人言。此蒜誰持去。守園者以上因縁具白大家。蒜主即大嫌責諸比丘尼。如是展轉世尊聞之。喚諸比丘尼種種呵責。告言。從今已去。比丘尼不得食蒜。食者波夜提（826c18-827a6）

その時、世尊は毘舍離にとどまっていた。城外に一人の信者がいて蒜を大量に栽培していた。偷羅難陀比丘尼は度々その蒜園の近くを通ることがあったが、信者には善心があり、福德をなそうと考えて、[偷羅難陀比丘尼に]「尊者は蒜を食べることができますか」と尋ねた。尼は答えて「もとより自分で食[を用意すること]はできないが、蒜が食として与えられて得られれば、大変善いでしょう」と言った。そこで信者はこれを施すとし、一日に衆僧に五顆の蒜を与えることを許した。そこで偷羅難陀は比丘尼たちに「某信者が一日に五顆の蒜をサンガに許したので、サンガがもし必要であれば沙彌尼を派遣し、行って取らせなさい」と言った。一人の比丘尼に蒜が必要となったので、式叉摩尼と沙彌尼を派遣し、行って取らせたが、丁度蒜を所有する主人は蒜を持って市場で売るために入城したところだっ

た。[一方] 一人の淨人がその蒜園を守る者であった。沙彌尼が「蒜を所有する主人はどこにいるのですか」と尋ね、淨人は「市場で売るために入城したところです」と答えた。そこで沙彌尼は「か[の主人]から蒜をもらうことになっています」と言うと、淨人は「私は知りません。ただ蒜を守ることだけを知っています」と答えた。そこで沙彌尼は怒って「主人が与えると認めているのだから、どうしてあなたに護る必要があるというのですか」と言って、自分の手でこれを掘り、「これは和尚の分」「これは阿闍梨の分」「これは今日の分」「これは明日の分」と、このように分けて、自分勝手に持ち去ってしまった。蒜を所有する主人が戻ってきて、この状態を見て守園人に尋ねて「この蒜は誰が持ち去ったのか」と言ったので、守園者は先の因縁を詳しく主人に伝えた。そこで蒜を所有する主人は、ただちに諸比丘尼を非難し、それが伝わって、世尊がこのことを聞かれた。

[世尊は] 諸比丘尼を呼んで種々に呵責し「今より以後、比丘尼は蒜を食べてはならない。食べれば波逸提である」と言われた。

以上が比丘尼に蒜を禁ずるに至った因縁譚であるが、ここで注目すべきは、蒜園を守護している者が淨人として登場している点である。因縁譚では、最初から淨人と称されているので、この者が比丘や比丘尼のために淨なる行為を行う者であることが前提となっているが、同じ人物が直後に守園人とも称されている。従って、彼には淨人としての側面と守園人としての側面の両方があることになり、淨人と守園人の関係を考える上での具体的な事例として留意する必要がある¹²⁾。

⑱不淨地・淨厨など

次に、不淨地・淨厨などに関して、以下のような記述がある。

有重閣。上屋欲崩向不淨地。諸比丘心疑。往白世尊。佛言。但使不壞。未落不淨處者。名爲淨房。衆僧住處未有淨厨。若衆集羯磨第一好房作淨厨者。佛所不聽。應用第二房作淨厨。若先作羯磨者。應還解羯磨第二房以爲淨厨。

12) 淨人と守園人の関係については、山極〔2002〕参照。

(829b20-25)

重閣があり、上屋が崩れて不浄地に向かおうとしていた。諸比丘は心に疑いを起こし、世尊のもとに言って尋ねた。世尊は「ただ壊れないようすべきである。いまだ不浄處に落ちていなければ、それを淨房と名付ける」と言った。衆僧の住處にいまだ淨厨がなく、もし衆が集まって第一の好房に羯磨を行って淨厨となしたならば、それは佛が許していないものである。

まさに第二の房を用いて淨厨となすべきである。もし先に羯磨をなしていれば、まさに解羯磨でもどして、第二房を淨厨となすべきである。

ここには二つの事例が解説されており、前者では建物が崩れかかっている場合でも、不浄地に至らなければ、その場所は淨房となることが示されている。また、後者については、淨厨を設定する場合には、最も好ましい状態の房を用いるべきではなく、解羯磨を用いてでも、第二以下の房を淨厨とすべきことが示されている。

⑩差僧淨人の事例

次に、安居に関わる解説が種々に行われる部分において、以下のような記述が見られる。

安居衆中上座。應當問大界標相處所。復問失衣不失衣處所。復應問淨處所。問布薩處所。説戒説法。差説法人呪願。差營事人。慰喻營事人。差行籌人。差僧淨人。(834a28-b2)

安居衆の中にあつて上座は、まさに大界の標相處所について尋ねるべきである。また、失衣・不失衣の處所について尋ねるべきである。また、淨處所について尋ねるべきであり、布薩處所、説戒説法、差説法人、呪願[人]、差營事人、慰喻營事人、差行籌人、差僧淨人について尋ねるべきである。

ここでは、安居の際に上座がなすべき事項が列挙されており、その末尾に差僧淨人（サンガの淨人を手配する役割の比丘）が誰であるのかについて尋ねるべきことが示されている。

②⑩沙彌と淨地、淨不淨法

次に、沙彌法について解説する部分において、以下のような記述がある。

沙彌法。沙彌得除草淨地取楊枝取花果。取來已應白和尚。和尚阿闍梨應當受取受用。沙彌法應知慚愧。應善住奉事師。法中不應懈怠放恣。應當自慎身口卑已敬人。應常樂持戒。莫樂調戲。亦不應自恃才力。復莫輕躁。應知慚恥。復不應說無定亂言。敢有言說應庠序合理。常應自知淨不淨法。常應隨逐和尚阿闍梨讀誦經法。一切僧中有所作皆不得違逆。如是廣知。

(835b13-21)

沙彌法とは、沙彌は除草の淨地を得たならば、楊枝を取り、花果を取り、取り来ることが終われば、[そのことを]和尚に告げるべきである。和尚・阿闍梨はそれを受け取り、受用すべきである。沙彌法とは、慚愧を知るべきであり、善く住して師に奉事すべきであり、法中は懈怠放恣となるべきではなく、自ら身口を慎み、己を卑下して人を敬うべきであり、常に自戒を楽しむべきであり、調戲を楽しむべきではない。また、自らの才力を恃むべきではなく、また輕躁になることなく、慚恥を知るべきである。また、無定の状態で亂言を説くべきではなく、言説する場合には順序正しく合理とすべきである。常に自ら淨不淨の法を知るべきである。常に和尚・阿闍梨に従って經法を讀誦すべきである。一切僧中に所作がある場合、みな違逆してはならない。このように広く知るべきである。

ここには、沙彌の心得るべき諸事項が列挙されているが、その中にまず食を淨地から運ぶ例が説かれている。さらに様々な心得を例示する中に、淨不淨の法を知ることが挙げられており、沙彌の役割として淨不淨を正しく理解し、その元で和尚や阿闍梨などの比丘に仕えるべきことが明示されている。

②⑪楊枝の使用法における淨地

次に、楊枝の使用法を例示する部分で、楊枝を使わないことによる五つの過患と、楊枝を使うことによる五つの功德とを示した後に、次のような記述がある。

有諸比丘。嚼楊枝時。或就僧坊内。或就衆僧淨地。或在經行處。或就師前。或大德上座前。佛聞之皆制不聽。(838b13-22)

比丘たちがいて、楊枝を嚼む時に、ある者は僧坊内で行い、ある者は衆僧の淨地で行い、ある者は經行處で行い、ある者は師の前で、ある者は大徳上座の前で行った。佛はこれを聞いて、みな許可しないと制した。ここには、楊枝を嚼んではならない場所の一つとして衆僧の淨地が示されている。

②鉢の淨施

次に、鉢・衣・尼師檀などに関して、制定の因縁（＝縁）、最初の規定制定（＝制）、その後の規定の改正（＝重制）という三種について解説を行っていく部分で、鉢の重制を列挙していく中に、以下の記述がある。

比丘尼得鉢。即日作淨施。不應過夜。此亦是重制（840a22-23）

比丘尼が鉢を得た場合、その日のうちに淨施を行うべきであり、夜を過ぎるべきではない。これもまたその重制である。

この直前に、長鉢（余分の鉢）の場合、十日を過ぎて蓄えてはならない比丘の事例が示され、その後に、比丘尼の場合は即日に淨施が必要であるとされていて、比丘尼の捨墮法として、比丘とは異なる規定（不共戒）が定められていることを踏まえた内容となっている。

③新衣と三點淨

上に掲げた鉢の三種に続いて、衣に関する縁・制・重制について解説を行っていく部分があるが、そこに以下の記述がある。

比丘得新衣。應作三點淨。（840b11）

比丘が新衣を得た場合は、まさに三點淨をなすべきである。

これは、衣に関する重制を種々に列挙する中に説かれるもので、新衣に対して三つの點をつけることによって、衣を古衣と同等のものにする淨法を示している¹³⁾。

13) 点淨に関する記述は『摩訶僧祇律』中に見いだされるが（T22, 369b24-c17; 452a18-19）、「三點淨」という語はなく、この部分と合致するわけではない。

②④長鉢と淨施

次に、昼や夜などの時間区分における諸規定に関する解説が行われる箇所、晝相應夜不相應の内容として以下のような記述がある。

若比丘尼得長鉢。即日施人及作淨施。至明相未現不犯若比丘尼得所用器聽畜。十六種器中各畜一。若長者亦即日施人及作淨施。至明相未現已來不犯。
(843c10-14)

もし比丘尼が長鉢（余分な鉢）を得た場合は、同じその日に人に施すか淨施すべきである。翌日の朝がいまだ現れない間に〔対処するに〕至れば不犯である。もし比丘尼が所要の器を得たならば蓄えることを許す。十六種の器のうちのどれか一つを蓄えるべきである。もし余分のものがあれば、人に施すか淨施すべきである。翌日の朝がいまだ現れない間に〔対処するに〕至れば不犯である。

ここでは、比丘尼の長鉢に関する対応が示されており、②②と同じ内容で淨施の事例が説かれている。

②⑤長衣と淨施

②④に続いて、増一法のように数に関わる相應法として、様々に律の内容を分類解説する箇所が続く。その中の十夜相應法として以下の記述がある。

十夜相應法者。若比丘畜長衣。不作淨施不過十日。畜長鉢不作淨施。亦不過十日。是名十夜相應法。(844a29-b2)

十夜相應法とは、もし比丘が長衣を蓄え、淨施をなさずに十日を過ぎない場合、〔あるいは〕長鉢を蓄え、淨施をなさずに十日を過ぎない場合、これを十夜相應法と名づける。

これは捨墮法の第一条の長衣に関する規定を、鉢についても同様にあてはめて例示しているものであり、どちらも十日以内に淨施をすれば罪に抵触しないとされている。従って、それを踏まえて、十日目の夜までは罪に抵触しない点から、十夜相應法として示しているのである。

②⑥八相應法と淨施

②⑤以降にも、数に関わる種々の相應法が解説されていくが、その中に、同一の事例に対して一相應法から二十相應法までを列挙する部分があり、そこに以下の記述がある。

八相應法者。若有長財。廣佛四指長八指。應作淨施。是名八相應法。

(845a21-23)

八相應法とは、もし長財（余分の財）があれば、広さが佛の四指、長さが〔佛の〕八指は、まさに淨施すべきである。これを八相應法と名づける。ここでの財が具体的に何を指すのかは記されていないが、広さが佛の四指、長さが佛の八指にあたるものは淨施すべきとされている。

②⑦二十相應法と淨施

ここも②⑥同様に一相應法から二十相應法までを列挙する部分であるが、そこに以下の記述がある。

二十相應法者。若比丘三衣不具盡力求索滿二十日作辦割截縫受持。若不辦至三十日得辦者割截縫受持。若過三十日不辦應作淨施。若不淨施犯捨墮。

(845c9-13)

二十相應法とは、もし比丘が三衣を具えていなければ、力を尽くして〔衣を〕探し求め、二十日を満たすまでに〔衣を〕準備することができたなら、割截縫して受持すべきである。もし整えることができず、三十日に至って〔衣を〕準備することができたなら、割截縫して受持すべきである。もし三十日を過ぎて〔衣を〕準備することができなければ淨施すべきである。

もし淨施しなければ捨墮を犯すことになる。

ここでは、衣を失った（失衣）場合の対応方法が期限とともに示されているが、これは捨墮法の第三条に基づく解説であり、最終的に三十日を過ぎるまでに淨施をしないと捨墮罪に該当するとされている。

②⑧染色相應と三點淨

次に、衣の色に関する解説として「染色相應」なる箇所があり、そこに以下

のような記述が見られる。

染色相應者。諸比丘衣色脱。佛聽染用十種色。十種色者。一泥。二陀婆樹皮。三婆陀樹皮。四非草。五乾陀。六胡桃根。七阿摩勒果。八佉陀樹皮。九施設婆樹皮。十種種雜和用染。如是等所應染者。此十種色。是衣三點作淨法。一用泥二用青三用不均色。用此三種三點淨衣。(846b7-13)

染色相應とは、諸比丘が衣の色を脱色しようとし、佛は染める際に十種の色を許可した。十種の色とは、一に泥、二に陀婆樹の皮、三に婆陀樹の皮、四に非草、五に乾陀、六に胡桃の根、七に阿摩勒の果、八に佉陀樹の皮、九に施設婆樹の皮、十に種種に雜和して染色に用いることである。これらのように染めるべき必要のあるものは、この十種の色である。[また]この衣に三點して淨法を行う。一は泥を用い、二は青を用い、三は不均なる色を用いる。この三種の三點を用いて淨衣とするのである。

前半には衣を脱色する際に十種の色が認められていることと、その十種がどのような色であるのかが示される。また後半では、三點をつける淨法について解説されており、三種の色で三點をつけて淨衣とすることが示されている。これは先に触れた②③に関連する具体的な内容である。

②⑨所應差人と淨地・淨厨

所應差人者。白二白四羯磨差人。先結不淨地。次結衆僧房舍。後結十界。結大界已當問衆僧。何處作淨厨。僧所可處結作淨厨。後結布薩處。最後結不失衣界。解界時。先解不失衣界。後解布薩界。復解衆僧淨厨界。次解大界。次解僧房舍界。次解不淨地界安雜物處教授比丘尼。自恣行籌僧使。爲四方僧營事。從檀越信心分粥分前食。乃至寺中淨人。不聽篤信檀越家乞食。作制狂亂失性爲尼受大戒。如是等及餘未列名者。差人作羯磨。是皆名差人相應法。(846b14-25)

所應差人とは、白二白四羯磨をなして人を派遣し、先ず不淨地を決定すべきである。次に衆僧の房舍を決定し、決定した後に大界を決定し、大界を決定しおわってから、衆僧に問うべきである。「どこに淨厨を作るのか」と。僧が許可する所に淨厨を作ることを決定し、その後に布薩處を決定し、

最後に不失衣界を決定するのである。界を解消する時は、先ず不失衣界を解消し、その後に布薩界を解消する。さらに衆僧の淨厨界を解消し、次に大界を解消し、次に僧房の舍界を解消するのである。次に不淨地界を解消し、雜物處を管理し、比丘尼を教授し、自恣や行籌について僧を派遣し、四方僧のために營事を行うのである。檀越の信心に従って粥を分け、前食を分け、乃至、寺中の淨人〔の指定〕や篤信の檀越家への乞食を許可しないこと、狂亂失性について制を作ること、比丘尼に大戒を授けること、これらのような事柄など、およびまだ名前を挙げていない事柄で人を派遣して羯磨をなすこと、これらすべてを差人相應法と名づけるのである。

ここでは、差人相應法として、人を指定・派遣してサンガの中で行うべき様々な事柄について、その名前や順序が列挙されているが、その中で界を定めるのに先んじて不淨地を決定することや淨厨を決定することが、解消の順序とあわせて示されている。界の設定や解消に、一定の順序があることを示す事例として留意する必要がある。

③⑩處所相應法と淨地・淨厨

②⑨に続く部分には「處所相應法」に関して、以下のような記述がある。

爾時世尊。爲病比丘羯磨淨地作食處。若客比丘来到。寺主人應語。不淨處。僧房處。結大界處。淨厨處。布薩處。不失衣界處。飲水處。是名虛所相應法。(846b27-c2)

その時、世尊は病気の比丘のために羯磨を行って、淨地に食處を作られた。もし客比丘がやって来たなら、寺主人はまさに「[ここが] 不淨處、僧房處、結大界處、淨厨處、布薩處、不失衣界處、飲水處である。」と語るべきである。これを處所相應法と名づける。

ここには、佛が病気の比丘のために淨地を設定し、食處を設けたこと、および客比丘に対して、僧院を管理する寺主人が提示すべき場所の中に、不淨處、淨厨が含まれることが示されている¹⁴⁾。

14) 「寺主人」の原語やサンガにおける役割については、その起源も含めて明確にはわかっていない。この問題については、Silk [2008] 参照。

③①捨墮10条と淨人

次に、律の規定に犯（＝違反）する事例に関して、それらが身口心（＝意）のどれによって犯となるのかを明かす部分があり、そこに以下の記述がある。

因心所起犯者。如三十事中。金銀施主所與。手雖不捉心作己有。語淨人持著某處。不語淨人言任汝所爲。如此比丘見他所犯。覆藏不向人發露。是爲心犯。(848b28-c3)

心によっておこすところの犯とは、[捨墮法] 三十事の中にあるように、施主が與えるところの金銀を、手によって捉えなくとも心によって自分のものであるとなし、淨人に語ってどこかの場所に持ち運ばせ、淨人に「あなたの思うように任せる」と言うことを語らない[場合がある]。このように、比丘が他の犯を見て、覆藏して人に向かって發露しないこと、これを心による犯となすのである。

ここでは金銀に触れることを禁ずる捨墮法10条が具体例として取り上げられており、その中で淨人を介する状況が示されている。但し、比丘の淨人に対する言動、ならびにその後に説かれている覆藏との関係については、必ずしも明瞭なものとはなっていない。

③②比丘尼の鉢と淨施

『毘尼母經』の末尾には比丘尼律に関する解説部分があるが、その中に「比丘尼毘尼」という箇所があり、そこに以下の記述がある。

若諸比丘尼得鉢。即日受持一。餘者若作淨施若遣與人。(850c7-14)

もし比丘尼が鉢を得て、その日に一つ[の鉢]を受持したならば、残りは淨施をするか、あるいは人に与えるべきである。

これは、比丘尼が新たに鉢を手に入れた場合の対応方法であり、長鉢（余分な鉢）は比丘と違ってその日のうちに淨施するか、他の者に与えなくてはならないことが示されている。この点については、上記②と同じである。

3. おわりに

以上、『毘尼母經』にあらわれる浄法をすべてピックアップし、その内容を確認してきた。これらの事例を踏まえ、説かれている浄法の内容に従ってまとめると以下のように整理・分類することができる。

(1) 浄地・浄厨・浄處等

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| ① 浄地羯磨 | ② 浄厨・浄厨處羯磨・浄施主・飢饉の事例(1) |
| ③ 浄厨處・浄人・飢饉の事例(2) | ⑨ 浄地とそこに生育した樹果 |
| ⑫ 浄厨處 | ⑬ 應作處と浄地・浄處所 |
| ⑮ 不浄地・浄厨など | ⑳ 沙彌と浄地、浄不浄法 |
| ㉑ 楊枝の使用法における浄地 | ㉒ 所應差人と浄地・浄厨 |
| ③⑩ 處所相應法と浄地・浄厨 | |

(2) 果実と浄

- | | |
|----------|----------------|
| ⑦ 果に対する浄 | ⑩ 果に対する五種浄・七種浄 |
|----------|----------------|

(3) 浄人等

- | | |
|--------------------------------|------------|
| ④ 亡比丘物の分割と浄人 | ⑧ 人養生具と浄人 |
| ⑮ 風病と浄人 | ⑮ 絡囊の保持と浄人 |
| ⑰ 比丘尼に対する蒜の禁止を語る
因縁譚と浄人・守園人 | ⑲ 差僧浄人の事例 |
| ③⑪ 捨墮10条と浄人 | |

(4) 衣・鉢と浄・浄施

- | | |
|--------------|---------------------|
| ⑤ 重衣における二種の浄 | ⑥ 衣の浄施 |
| ⑪ 和合の衣と浄衣 | ⑭ 迦絺那衣を受けることによる五種の利 |
| ②② 鉢の浄施 | ②③ 新衣と三點浄 |
| ②④ 長鉢と浄施 | ②⑤ 長衣と浄施 |
| ②⑥ 八相應法と浄施 | ②⑦ 二十相應法と浄施 |

②⑧染色相應と三點淨

③②比丘尼の鉢と浄施

これによって明らかなように、浄地など場所に関わる浄法、浄法に関わる在家者としての淨人等、衣と鉢の受持に関わる浄法（浄施）など、いわゆる広律で扱われている内容をほぼ網羅したものとなっている。加えて、すべての事例において、浄法それ自体の存在が前提となって解説がなされており、『毘尼母經』が対象とした律本体に、既に浄法が組み込まれていることと、『毘尼母經』を伝持した集団が浄法に基づく組織運営を行っていたことが明確に示されている。

また、浄地に関わる事例においては、飢饉の際の特殊な規定運用を示す「儉開八事（七事）」の事例が複数箇所に取り上げられており、食に対する対応方法や浄地と果実の問題など、諸律との対応関係について考察すべき部分なども含まれている。この問題は、これまで不明とされてきた『毘尼母經』の部派所属を考える上で新たな視点となるものでもあり、更に詳細な比較検討を行う必要がある。

一方、〈パーリ律〉『四分律』『五分律』『摩訶僧祇律』においては、波逸提法において「二種の浄施（現前浄施と展転浄施）」が等しく提示されているが¹⁵⁾、そのような分類や、これに関わる解説はどこにも存在しない。諸律が示す二種の浄施は、具体的な浄施の運用方法として重要な問題であるが、それに全く言及していないのは何故なのか、『毘尼母經』が基づく律本体との関係も含めて、あらためて考察する必要がある。

今回の検討によって、浄法に関するいくつかの事例で、『毘尼母經』が『四分律』と近い関係にあることが確認された。その点だけでこの資料の部派帰属について結論を出すことはできないが、『毘尼母經』に説かれている特定のテーマに関する検討が、この文献の所属を明らかにしていくための重要な方法であることは確認できたと言える。そのような検討の延長線上に、律蔵における『毘尼母經』の位置づけを解明するための答えが隠されていると思われる。

15) 〈パーリ律〉(VRI Pācittiya Pāli, 164.14-165.2; PTS VP IV, 122.9-18)、『五分律』(T22, 69a14-b16)、『四分律』(T22, 676b2-19)、『摩訶僧祇律』(T22, 379a12-b5)。『十誦律』〈根本説一切有部律〉に説かれない点も含めて、諸律の比較については、山極〔2009〕参照。

この点を十分に意識しながら、更なる検討を重ねていきたい。

《略号》

PTS=Pāli Text Society.

T=『大正新脩大藏經』高楠順次郎編，全100巻，大正一切經刊行會，1924-1932.

VP=*The Vinaya Piṭakam* (ed. by Hermann Oldenberg), 5 vols. London: Pali Text Society, 1929-1964.

VRI=Vipassana Research Institute.

VRI Cūllavagga-Pāli=*Dhammagiri-Pāli-Ganthamālā* 90, Devanāgarī edition of the Pāli text of the Chaṭṭa Saṅgāyana, published by Vipassana Research Institute, India 1998.

VRI Pācittiya-Pāli=*Dhammagiri-Pāli-Ganthamālā* 88, Devanāgarī edition of the Pāli text of the Chaṭṭa Saṅgāyana, published by Vipassana Research Institute, India 1998.

【参考文献】

Clarke, Shayne. 2004. *Vinaya Māṭrkā* - Mother of the Monastic Codes, or Just Another Set of Lists? A Resppnse to Frauwallner's Handling of the Mahāsāṃghika *Vinaya*, *Indo-Iranian Journal* 47: 77-120.

平川彰1999（1960）『平川彰著作集第9巻 律蔵の研究Ⅰ』春秋社、1999（原載『律蔵の研究』山喜房佛書林、1960）。

平川彰2000（1960）『平川彰著作集第10巻 律蔵の研究Ⅱ』春秋社、2000（原載『律蔵の研究』山喜房佛書林、1960）。

三友量順2005「毘尼母經 解題」『新国訳大藏經 毘尼母經』律部10、大蔵出版、3頁～13頁。

境野黄洋1932「毘尼母經及薩婆多毘尼毘婆沙解題」『国訳一切經』律部十五、大東出版社、（1）頁～（4）頁。

Schopen, Gregory. 2018. "On Monks and Emergencies: The Brahmanical Principle of Āpad in a Buddhist Monastic Code." In *Reading Slowly: A Festschrift for Jens E. Braarvig*, edited by Lutz Edzard, Jens W. Borgland, and Ute Hüsken, 37-391. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Silk, Jonathan. 2008. *Managing Monks. Administrators and Adiministrative Roles in Indian Buddhist Monasticism*, Oxford University Press.

山極伸之1999「律規定の解禁をめぐる諸問題」『印度学仏教学研究』、48-1、498頁～504頁。

——2001a「初期仏教教団における食の受容-浄地をめぐる諸問題-」『仏教文化の基調と展開 石上善應教授古稀記念論集』2001年、山喜房佛書林、307頁～322頁。

——2001b「パーリ律經分別にみられる浄法」『香川孝雄博士古稀記念論集 佛教学浄土学研究』2001年、（左）203頁～221頁。

——2002 *Ārāmika* - Gardener or Park Keeper? One of the Marginals around the Buddhist saṅgha, *Buddhist and Indian Studies in honor of Prof. Sodo Mori*, Kokusai Bukkyoto Kyokai, 363-385.

- 2003「パーリ律犍度にみられる浄法」『文学部論集』（佛教大学）2003年、第87号、（左）1頁～15頁。
- 2004「パーリ律パリヴァーラと浄法」『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学佛教学論叢』第2巻、2004年、217頁～235頁。
- 2009「律蔵が示す浄施の種々相」『日本佛教学会年報』第74号、231頁～252頁。
- 2013「『摩訶僧祇律』に見られる浄法」『佛法僧論集 福原隆善先生古稀記念論集』山喜房佛書林、127頁～149頁。
- 2014「十誦律にみられる浄法」『法然仏教の諸相 藤本浄彦先生古稀記念論文集』法蔵館、21頁～46頁。
- 2019「『鼻奈耶』にあらわれない浄法」『印度学仏教学研究』、68-1、457頁～464頁。